

コラム『街・建物・暮らし』16

明治時代中期のレンガ倉庫が秘める「全盛期の記憶」

～この倉庫から世界中に日本の茶が送られた～



明治の建物が日本人に郷愁を催させるのは、赤レンガが多用されているせいかもしれない

写真の赤レンガの建物の正式名称は『菊川赤れんが倉庫』だ。

歳を重ねた人に歴史あり、レトロな建物に由来あり——というわけで、1892（明治25）年～1893（明治26）年頃、静岡県城東郡西方村（現・菊川市）に竣工したこの建物は、公式資料によれば「梁間4間、桁行6間、地上2階建てレンガ造り、木造洋小屋組み、屋根は寄棟煉瓦葺き、木造や鉄骨造りを基本とした構造のレンガ造りではなく、レンガのみで構成された建物」で、国登録有形文化財ともなっている。

明治初期に静岡の茶産地の仲間入りした菊川市は、深蒸し茶の製法を発見して以来、遠州駿河の国を代表する産地となり、現在に至っている。『菊川赤れんが倉庫』は菊川の茶産地としての勢いが急激に伸びた明治時代後期から大正・昭和初期にかけて、茶葉のブレンドなどが行われた製造工場だったとされる。

内部は現在、展示施設兼多目的スペースになっており、欧米各国に菊川のお茶が横浜港から出荷されていた頃のカラフルな茶箱等も

常設展示されている。

茶箱というと木箱に銀紙を張ったような地味なものを想像するかもしれない。しかし、菊川（静岡）のお茶は高級品として取り扱われていたため、輸出する際には欧米人が喜ぶようなきれいな絵画で飾られた木箱を使用していたのだとか。エキゾチックな絵柄は、戦前の平和だった時代の高級嗜好品を飾るにふさわしい、ギフト感満載の出来栄で、いま見ても非常に新鮮である。

蒸したり乾燥させたり手もみしったりのお茶の製造工程は、人力に追う部分も多かったが、工場内は電化が進んでいたはずだ。保存用にも使われた赤レンガ倉庫は、日除けや湿気除けのためか、窓がかなり小さい。

電灯が灯されなければ、とてもではないが作業は出来なかっただろうし、電力等の助けがなければ製造もままならなかっただろう。訪問した際は内部もじっくり見学させてもらったが、東の間、タイムスリップしたかのような、気持ちのよい酩酊感を味わうことができたのだ。た。た。た。（砂耳）